慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	A.J.P. Taylor, Germany's First Bid for Colonies. 1884-1885 (A Move in Bismarck's European Policy). 1938.
Sub Title	
Author	山本, 登
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.1 (1940. 1) ,p.123(123)- 129(129)
JaLC DOI	10.14991/001.19400101-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400101-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

A. J. P. Taylor, Germany's First Bid for Colonies. 1884-1885.
(A Move in Bismarck's European Policy). 1938.

山本　登

一八七一年の普佛戰爭の終結と獨逸帝國の統一完成は、歐洲大陸內部に於ては、少くとも暫定的安定期の到來を意味するが如くであつた。事實其後の歐洲先進資本主義國の對外擴張活動は、歐洲以外の地域における未領有地の分割乃至は弱小國への政治的經濟的支配權の確立を目標として遂行された。所謂列强による高度の資本主義的植民活動の開始である。此の目的に向つて其の活動領域として取上げられたのは、言ふ迄もなく阿弗利加大陸及び南太平洋諸島或は支那の如き封建的社會であつた。就中未開な阿弗利加大陸は、歐洲大陸に對する其の地域的接近性から見ても絕好の對象地を形作つた。即ち英國は埃及のウガンダ及びスダン、英領東阿弗利加、ソマリー、ザンジバル、ベンバ等を占領し、西阿弗利加に於ては從來の植民地を擴大する傍ら、ナイヂェリアを取得し、又南阿弗利加に於てもローデシア及びボーア共和國の攻略に成功した。佛蘭西も亦普佛戰爭後の國內政治・經濟機構の立直し完成と共に、一八八〇年代より、再び積極的な植民地建設運動を起し、セネガル及びチハラにおける領土擴張に次いでテュニス、マダガスカル等へ侵略の手を伸ばした。而かも阿弗利加大陸における英・佛の活動の裏面には、又次

A. J. P. Taylor, Germany's First Bid for Colonies, 1884-1885,
(A Move in Bismarck's European Policy). 1938.

の如き意圖が伏在してゐたと考へても差支なからう。即ち英國は埃及における優越的勢力の確保及び南阿弗利加植民地の設定を企てる事により、是等領域自身に就いての政治的支配權の確立、經濟的利益の取得を目指す以外に、實に極東方面就中「英國の寶庫」印度への通路確保を第一義的に見たのであり、佛蘭西の活動は又、普佛戰爭の敗北にも拘らず同國は依然たる強國の一たる事を對内的・對外的に誇示せんとする政略的意圖を多分に含むものであつた。

此の間にあつて、普佛戰爭の勝利を契機として、其の國家的統一を完成した獨逸は、宰相ビスマークの統率の下に戰後暫くは國内政治・經濟的基礎の確立に專念せざるを得なかつた。その限り國家としての積極的な植民活動は行はれず、唯進出的な精神に富む數名の探險家、或は商人を首班として個人的な植民企業が、阿弗利加大陸又は南太平洋方面に見られたに過ぎなかつた。而かも其後の獨逸國内經濟の急速な發展、殊に其の重工業部門の飛躍的な發達は、短日月の間に獨逸をして高度工業國の地位にまで押し上げた。斯かる段階に到達するに及んで、獨逸は、自國のヨリ以上の發展を計る爲に、今や先進諸列强と相並んで、必然的に植民活動に乘出さゞるを得なくなつた。換言すれば工業國獨逸にとつて、原料供給地、商品販路としての植民地領域獲得は、不可缺の條件となり來つたのである。

斯くの如き其の國自體の發展的要求の前には、宰相ビスマークも從來の如き消極的方針を放擲するの餘儀なきに至り、一八八四年四月始めて植民事業に對する國家としての積極的援助の態度を明かにした。爾來獨逸の活動は阿弗利加大陸に於て又南太平洋に於て、急速な進展を見せる事となつたのであるが、此の一八八四—五年を轉機とする獨逸の攻勢的態度への轉化こそは、其後の植民活動の基礎を與へるものとして、且つ亦、軈て招來される列强間の激しい對立紛爭への誘因として最も注目に價するものである。實に本書は其の表題の示す如く、斯かる時點を捉へての問題の解析であり、ビスマークの政策を中心とする其の叙述は、上述の意味に於ける獨逸の活動と、それをめぐる諸列强の當時の係爭關係を知る上に、格好のものである。

英・佛先進兩國の既成勢力に對して、後から割込んで行つた獨逸の植民活動が、最初より種々なる困難と障碍に逢着したのは蓋し當然であつた。從つてビスマークは先づ其の各個撃破を目指して、英・佛間の軋轢の間隙を利用しつゝ獨逸の進出を企てた。斯くして彼が採用した最初の手段は佛蘭西への接近策であつた。（第一章）、蓋し當時の獨逸にとつて、普佛戰爭に對する佛蘭西側からの復讐戰の危惧は、大なる脅威の一つであつた。從つて此の佛蘭西の攻勢の鉾先を轉ずるには、佛蘭西の對外活動を支持する事によつて其の歡心を買ふのが賢明な策と考へられた。斯くして一八八二年埃及に關して惹起された英・佛間の紛爭に際して、獨逸は佛蘭西を援助した。而かも其の反面には、斯くして佛蘭西と共同戰線に立つ事によつて、獨逸自身英國の勢力内への侵入を計る意圖を有した事は見逃せない。玆に英・獨間に問題となつたのが南西阿弗利加のアングラ・ペクナ灣附近の地域である。（第二章）、元來此の地方には英國の活動が早くより行はれ、獨逸としては一八六〇年頃より宣教師の傳道事業が見られたに過ぎなかつた。然るに一八八三年に入つて、ブレーメンの商人リューデソッツが同地に商館の建設を企て、同時に土人酋長との直接交渉によつて同年五月先づアングラ・ペクナ灣附近の土地購入に成功し、更に同年八月には、更に廣大な地域の購入契約を結んだ。そこで同地域の主權に關し、英・獨間に交渉が開始された。而かも當時英國政府は埃及問題に忙殺されてをり、アングラ・ペクナの如き南西阿弗利加の一角の地に關する交渉に敏速に應じ得なかつた。此の事は獨逸にとつて絶好の乘ずべき機會を與へる事となつた。即ちビスマークは英國側からの回答の遲延を理由

として、一八八四年四月、ロンドンの獨逸大使並びにケープ在任の獨逸總領事に宛て「リューデツツの植民事業は獨逸帝國の保護の下に置く」旨の決意を打電し、玆に既に一言した如く、始めて植民活動に對する國家としての積極的態度を明かにした。

而かも是れに對する英國側の抗議を强硬に斥け、其後數次の交渉の後同年九月までに、此の領域を中心に獨領南西阿弗利加植民地の設立に成功した。（第三章）、斯くの如く殆んど犧牲を拂ふ事なしに英國側からの障碍を避け得たのは、實にビスマークの巧妙なる外交政策の運用に依るものであり、就中對佛協調策の成果に外ならなかつた。アングラ・ペクナ問題を巡つての英・獨外交々渉の經緯は、第二章第三章に亙つて詳さに展開されるが、兩國外交の掛引の跡は頗る興味深いものがある。此の場合に當然感ぜられるのは、獨逸の能動的な態度であり、英國の意想外に受動的立場である。此の英國の態度に就いては、外交々渉上の敗北と言ふ以外に、當時英國自身、此の地域に對しては、左程の關心を持つて居らなかつたと言ふ事を指摘し得ると考へられる。

本書に於ては委しく扱はられて居らないが、同じ期間に、獨逸は亦西阿弗利加に於ても同樣の成果を擧げた。それはナハチガル博士一行の、トーゴーランド、カメルーン地方に於ける活動であつた。殊にカメルーンには從前より英・佛の利害關係が濃厚であつたにも拘らず、博士は偶々獨逸人個人商會が同地の酋長と結んで居つた條約を、帝國の名に於て批准する事によつて巧みに英・佛の機先を制した。而かも其後の交渉により英國をして獨逸の優先權承認を餘儀なくせしめたのである。

斯くの如くして一八八四年四月より九月までの僅々半箇年の間に、獨逸は阿弗利加大陸に於て、其の植民活動を着々と押し進め、領域擴大に異常な成功を示した。而かも本書によれば、それに引續く三箇月即ち十月より十二月までの間は、停滯の期間と解される。（第四章）。事實此の期間には、阿弗利加問題に關して、英・獨間に尙ほ事後交渉が繼續されて居り、且つ又、埃及問題に就いては英・佛間の折衝が續けられて居つた。そこで獨逸としては、其の自己保存・發展の立場から、今後英・佛何づれに組するを利とするかを打算中であり、其間の錯綜せる外交關係の展開に止つて、何等の具體的な活動は見られなかつた。但し斯かる間にあつて、元來白耳義によつて開發せられた所謂コンゴー盆地の門戸解放に關し、獨逸の提唱によつて開催せられたベルリン會議は、獨逸の國際的地位の向上を示す最も適當な證左と解されよう。

海外における獨逸の次の活動は、一八八四年末より翌年三月にかけての、南太平洋ニュー・ギニア諸島をめぐる對英紛爭を惹起した。（第五章）。阿弗利加大陸と共に南太平洋の未開領域が、當時列强の對外活動領域を形成した事は既に一言した如くである。所で此のニュー・ギニアの地には早くから和蘭の勢力が及んでゐた。獨逸も亦從來二・三の個人的植民會社の下に活動を行つてゐたが、軈て濠洲が英國の援助を背景として同地方諸島への侵略を企てるに及んで、英・獨間の形勢は頓に惡化した。斯かる情勢の下に一八八四年末ベルリンに設立されたニュー・ギニア會社は、獨逸政府の援助によつて蘭領ニュー・ギニアの北方地域及びニュー・アイルランド、ニュー・ブリタニア兩群島を占領した。此の問題に關し英・獨間の談判は一時可成りの緊張を見せたが、結局翌年三月兩國間に協定が成立し、玆でも獨逸は占領地域の領有權を確保し、且つニュー・ギニアの北部占領地域をカイゼル・ウイルヘルムスランドと改名し、又前記の二群島を合してビスマーク群島と改稱した。

此のニュー・ギニア問題の解決に際しては、英國が獨逸に對して許容した領有權の代償として、其後獨逸は埃及問題に就いて英國を支持するとの了解が爲されてゐた。而かも事態の成り行きは豫期に反し、獨逸は再び東阿弗利

加ザンジバル島及對岸地方の問題に關して英國と衝突するに至つた。（第六章）、ザンジバル島及其の附近に關しては元來一八六二年英・佛によつてサルタンの主權が承認されてゐた。然るに一八八四年末、獨逸人ピータース博士等は其の對岸の大陸本土に上陸し、內地の土人酋長と保護條約を締結し、六萬平方哩の地域を獲得した。而かも翌年二月獨逸政府はピータース等の植民會社に特許狀を下付し、且つ其の旨を英國政府とザンジバル王國とへ通告した。是れに對し、ザンジバルのサルタンは抵抗を試みた後、獨逸に屈服した。他方英・獨間には新たな係爭問題を生じ、更に佛蘭西も加はつて國際委員會が設立され、實地踏査の結果、三國間に次の如き妥協が成立した。即ちそれによると佛蘭西はマダガスカル島に對する單獨處分權を獲得し、英・獨は陸上に於て北半を英國、南半を獨逸の勢力範圍と定めた。其後獨逸はザンジバル王の諸權利を四百萬マルクで買ひ取り、獨領東阿弗利加植民地を完成した。

然して此のザンジバル問題の解決に際しては、獨逸の態度は著しく英國と妥協的になり來つた觀がある。而かも從來の親佛抗英の逆を行つて親英抗佛に轉じたのではなく、佛蘭西に對しても友好的關係の持續を計つた如くである。謂はゞ諸列强に對しての協調的政策の採用であるが、此の事は實に海外植民活動に限定されてゐた。即ち第十九世紀末期に至り、更に高度の發展段階に進むに至つた列强の資本主義的利害が再び歐洲大陸自身或はその接壤地域に於て、例へばバルチック或はバルカン・近東の諸領域に於て、對立激化の機運を釀し出しつゝあつた事情からして、獨逸としても海外活動に於ては他列强との摩擦を少くし、その反面に於て歐洲における勢力の確保を計らんとの意向が明確になりつゝあつたのである。殊に元來は國內充實第一主義であつたビスマークが、斯かる事情の進展に應じて、再び海外活動よりも歐洲對策に注意を向けたのは當然と解されよう。從つて海外植民地領域に就いては既得地域の境界設定に關して諸列强と比較的穩健な交涉を續けるに止り、專ら歐洲工作に目を向けんとしたのであつた。一八九〇年の英・獨植民協約の成立は、ビスマーク退官後ではあつたが、彼の最後の置土產であり、就中英國よりのヘリゴランド島の讓り受けと、其の代償としての東阿弗利加における諸種權益の提供は、其の最も典型的な現はれであつた。而かも斯くの如きビスマークの堅實な判斷は、新帝カイゼル・ウイルヘルム二世の容れる所とならず、彼は一八八九年職を辭して隱退した。而して其後は此のカイゼルの統卒下に、更に華々しい對外活動が展開される事となり、それは軈て英・佛との激しい對立を生み、結局は世界大戰の勃發へと導くに至つたのである。假令ビスマークが更に在職して對外政策を指導したとしても、獨逸自身の經濟的發展と列强との其の競爭は、究極に於ては戰爭を招來したには違ひないであらう。然しビスマークならば、より一層巧妙な工作を行つたであらうし、且つ亦、ビスマークの後繼者達が彼ほどの手腕を持たないにも拘らず、ビスマーク的な方策を無暗に踏襲せんとした點に、獨逸の躓いた原因があつたと解する著者の結論は、甚だ示唆に富めるものと言へよう。

（一九三九・一一・二〇）